

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 18日現在

機関番号: 12606

研究種目: 基盤研究(B)

研究期間: 2009~2011

課題番号: 21320037

研究課題名(和文) 地域医療と「芸術の臨床」をめぐる相互作用に関する総合的研究

研究課題名(英文) The research for capturing possible and social interactions between art project and community care for psychiatry.

研究代表者

桂 英史(KATSURA EISHI)

東京藝術大学・大学院映像研究科・教授

研究者番号: 60204450

研究成果の概要(和文): 「芸術の臨床」が地域医療およびコミュニケーションとどのような関係にあるかというテーマについて、実際の臨床やアートプロジェクトの事例を通して考察した。その結果、コミットメントの前後に、参加者(患者あるいは他者)とプログラム(治療者あるいは自己)の間にある、イメージをめぐるルールの変更がメタ・コミュニケーション的に行われることがプロジェクトの必要条件となることを論じた。

研究成果の概要(英文): To propose possible and social interactions between art project and community medicine, we extracted specific communications from several cases of the actual clinical practice and our art project. In conclusion, we conjectured that it was absolutely necessary for the art project to redefine participant's idea against the program.

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2010年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2011年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
総計	8,100,000	2,430,000	10,530,000

研究分野: 人文学

科研費の分科・細目: 芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード: アートプロジェクト、コミュニティ・ケア、相互作用、ナラティブ、地域医療

1. 研究開始当初の背景

生物化学的あるいは臨床科学的医学研究は、飛躍的な発展を遂げたが、研究の発展が広い意味での「ケア」の発展には必ずしもつながっていない。そのため、当時の医学分野においては、生を目的と手段という見地からのみ科学的に捉える風潮に歯止めをかけるように、病態を環境まで含めた多因子からなるシステムの異常として

捉える NBM(narrative based medicine)-物語に基づく医療-に脚光が当てられるようになっていた。同様に、芸術表現活動も1960年代以降、個と社会環境の「相互作用」がテーマとして重視されるようになっており、この方向性は、総合的な観点を必要とされている現代医学の問題点とはほぼ軌を一にしていると思われた。

2. 研究の目的

地域医療の現場と芸術表現の機会創出(アートプロジェクト)の場との間に協働関係を持たせることによって、実際に実現可能なアートプロジェクトをフィールドワークとして実践することを中核とし、下記の問題についてあきらかにすることを課題とした。

(1) 医療面接中の熟練の治療者の映像撮影を試みることにより治療者から発せられる、言語的、非言語的な構成成分を余すところ無く記録し、臨床における芸術(アート)とも呼べる、一種の芸術表現の可能性を模索する。

(2) 他分野の専門家と勉強会を行い、地域住民を含めたワークショップを施行することにより、地域における治療環境にどのような形態の芸術表現がどのように適合するかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 医療面接における治療者の継時的撮影
外来医療面接における映像によって治療者の継続的な撮影を行い、編集、考察を行った。

(2) アートプロジェクト企画・調整
地域のクリニックとその周辺をフィールドとして、コミュニティ・ケアを念頭に置いたワークショップやアウトリーチプログラム等のアートプロジェクトを企画・調整、実践した。

(3) 比較研究
現地調査を重ねながら「formalでprivateな相互作用」と「informalでpublicな相互作用」との比較を重視したマイクロエスノグラフィーの方法論を検討した。

(4) 研究方法の変更
研究開始当初に想定された日本伝統医療科学大学院大学が学生募集停止に追い込まれたことが決定し、それに併設された医院(日本伝統衣料科学大学院大学付属医院)でのプロジェクト継続が困難となったため、共同研究者・西條朋行の尽力により、東京都荒川区のあべクリニック(東京都荒川区)でプロジェクトを継続することが可能となった。あべクリニックは個人経営の医院でありながら、専門スタッフを擁するデイケア施設をもち、地域との連携も強い個人クリニックとしては希有な医院である。

4. 研究成果

本研究課題は、芸術表現の機会創出(アートプロジェクト)の場、あるいは医療の現場(臨床)において発揮されている芸術(アート)そのものを「芸術の臨床」と位置づけ、地域基幹病院をプロジェクト実践の本拠に据え、地域の医療施設と既成の原理を超えた、その実践的方法論を開発研究する目的で、以下の実践研究を行った。本課題の研究成果として挙げられる。

【医療における相互作用に関する調査】

医療面接における治療者の継時的撮影・編集・解析を、精神科面接において、治療者の映像と音声を撮影、録音し、その集められたナラティブからプレミナリーに、formalでprivateな相互作用について検討した。その結果、ベイトソンの言う、対称型や相補型の関係を抑制しうる機会となるコミットメントであれば、新しい現実を創出することとなり、その気づきは、双方が同時に経験していることが明らかになった。上記を考察し、論文を作成し、掲載された。

【媒体別の参加意識に関する調査】

あべクリニック(東京都荒川区)をフィールドとして、平成20年度に続いて、ビデオ、絵画、写真を表現媒体とするワークショップを継続的に開催した。この実践を通じた知見から、メタコミットメントと呼ぶべき関与がある「遊び」や「作品」は、そのメタコミットメントに含まれる、いまだに遭遇したことのない知覚の状態や思考のプロセスによって、表現するものの興味が喚起され、結果として、より高次なものへ醸成されていくことを観察し、論文として発表した。写真およびビデオを用いたプログラムが高じて、長時間に渡るセルフ・ドキュメントが制作されるようになり、それをきっかけとしてグループでの製作だけでなく、信頼関係を確立した個人(患者)に映像制作を促すことにもなった(ワークショップに関しては次項に詳述)。

【ワークショップ開催による記録的特性による日常の概念の再考】

デジタルカメラワークショップ「日常採集」について
場所:医療法人 讃友会 あべクリニック
実施時間:13:30~15:00
期間:2008/12/26~現在
平均参加者数:8名(閲覧のみ参加は20~30名)

精神病院が歴史的に社会の周縁に位置づけられる事をミシェル・フーコーは論じたが、見る者と見られる者との権力関係は現在の精神障害者にも医療行為や病院建築の中に偏在している。見られる存在としての精神障害者は繰り返し語られ、写真の被写体としてもダイアン・アーバス等の写真家によって撮影されてきた。しかし、見る存在としての精神障害者について語られることはあまりない。

ここでは、精神障害者による写真を通して、日常の概念について考察を行う。日常とは社会背景や時代背景によって大きな差異が現れる概念である。パリを記録したウジェーヌ・アジェや19世紀の日常を記録した写真を眺めてみると、現在とは異なる服装や文化の様子を強く感じさせる。一方では、家族の間の自然な会話の様子など時代や風土を越える普遍性が記録されている写真もある。果たして、精神障害者による日常の写真に特異的な様子が撮影されるだろうか。

医療現場で行われる写真のワークショップにはフォトセラピーがあるが、これはジョー・スペンスが1980年代後半に自身の老いを撮影する中で使用した用語が発端となっている。国内では山中康裕著『少年期の心 - 精神療法を通してみた影 -』中公新書(1978)で写真を使用した療法について記述されたのが先駆的とされる。現在では、写真療法やフォトセラピーとよばれ治療的側面や社会復帰の一助として考えられている。また、障害者の生活の質向上という社会活動の文脈のなかで、自己表現という名目から障害者の写真を展示する企画も多く見られる。これらの活動には写真を使用しているという手法の違いはあれ、基本的には絵画療法や一般的なセラピーと大差のない概念であると考えられる。

あべクリニックで行っている写真ワークショップ「日常採集」は上記の治療的側面や社会活動の側面からは一線を画すものである。形式としてはワークショップの形を採るが、講師が知見を教授する教育モデルではなく、文化人類学等のフィールドワークにおけるインフォーマント(情報提供者)として参加者を定義してゆく。両者の大きな違いは、知識の在処が講師側にあるか、インフォーマント側にあるかという点である。収集対象が「日常」という極めて個人的な差異のある対象であるため精神障害者という枠組みを捉えきれない可能性は大いにあるが、そもそも精神障害者

が社会の周縁に位置づけられているという考え方や、特異な存在としての精神障害者が存在するのであれば、精神障害者の撮影する写真にも彼らの視線としての世界像が現れるのではないかと考えている。



【新しい個人映画への展開】

過去のワークショップ等で信頼関係が確立して、さらには映像表現に高い関心をもつ統合失調症の病歴をもつ協力者数名にビデオカメラを貸与し、彼らの日常を彼らなりの手法(ビデオカメラの操作方法だけを教授し内容に関しては一切関知しない方法)で映像表現するという「セルフドキュメンタリー」という手法を確立した。本研究では、それも映像メディアを介した、ひとつのNBM(Narrative Based Medicine)のひとつと考えている。現在は撮影だけであるものの、さらには編集技術を習得するという段階で現在までに編集からパッケージ化の道を探り、ひとつの方法論として確立しつつある。

【東日本大震災関連インタビュー調査】

現在公開の方法を、関係者の利害調整も含めて検討している。また研究計画にはなかったが、東日本大震災の発生に伴い、急性精神疾患に現地で対応する盛岡晴和病院の智田文徳医師へのインタビューを行うなど、現地調査を行い映像によるインタビューを収録し、その成果の一部はせんだいメディアテーク(宮城県仙台市)「331をわすれないセンター」に寄贈された。

【研究成果の総括】

(1) 医療面接における治療者の継時的撮影に関しては、地域クリニックでの精神科面接において、治療者の映像と音声を撮影、録音し、その集められたナラティブから精神科面接にて生じている相互作用について検討した。その結果、会話の内容そのものよりも、患者と治療者の間にあるイメージをめぐるルールの変更がメタ・コミュニケーション的に行われることが回復の必要条件であることが帰納的に推察された。

(2) アートプロジェクト企画・調整および実践に関しては、地域医療の中核となっているメンタルクリニックのデイケア施設において、写真撮影のワークショップを継続的に行い、さらに「セルフドキュメンタリー」の手法に基づく、ビデオ撮影のワークショップを開始した。その結果をまとめて地域クリニックにおいて研究会を実施し、関連諸領域の専門家や、地域住民の参加を得た。

(3) 本研究を通じて、「セルフ・エデュケーション」という方法論がメディア利用との関係から明らかになった。

セルフ・エデュケーションとは、個人が試行錯誤を重ねながら、他との関係性も含めて把握あるいは巻き込まれることで、自分なりの表現、批評を行い、自己を成熟させていくという過程や方法を意味する。

統合失調症や糖尿病など、慢性の病においては、症状が寛解(治癒と再発の中間状態)に至り、維持期(症状が落ち着いた状態)となっても、再燃防止のための数年あるいは数十年にわたる薬物療法、生活習慣、対人交流、思考様式にまで及ぶセルフ・コントロールが必要となる。再発防止のために、疾病教育としてそれらの重要性を頻繁に患者に説明し、それらを効果的に行うデバイスやツールの開発も日々なされている一方で、統合失調症患者の半数が治療を中断し、その約7割が再発するという報告や、糖尿病患者においては2-4割の患者が治療を中断し、重篤な合併症を患うという報告がなされている。知的発達の問題がなく、現実検討能力が十分に保持されている事例においても、この現象が頻繁に生じていることから、知性や意志のレベルへの働きかけだけでは不十分であり、感情、情動をこそ説得させるような働きかけが必要であることが認識される。

一方、脳科学研究においても、情動体験を伴う記憶は長期に保持されることが明らかになっており、「最初に情を説得する」というアプローチの検討は急務であると思われる。その点で何らかの芸術表現や創造的な行為の貢献は必要条件となる。

ベイトソンが行為としての芸術について「獲得された無意識的な前提と、より個別的な意識内容および具体的行為の間に橋を架けるもの」としているように、上述のような、制約のない映像制作などの、セルフ・エデュケーションの発露が観察される芸術や創造行為は、知覚でき意識できる具体的行為を通して、意識下に潜む感情や情動を大きく揺さぶることが可能である。逆に慢性疾患の患者が、感情の納得に至ることで、セルフ・コントロールが無意識的な前提となり、寛解状態の維持へ具現化するプロセスは、セルフ・エデュケーションが発露する創造的な状態と言える。

(5) 比較研究とその評価に関しては、現在までに、海外、国内において行われてきた、芸術と臨床のコラボレーションを概観し、また、上述(2)で得られたコミュニティ・ケアへの発展の方法や、マイクロエスノグラフィーの方法論を2本の新規論文にまとめ掲載された。

(6) さらには継続的なワークショップの成果として、自発的に個人映画を製作する参加者(統合失調症の羅漢者)が出現し、コミュニティ・ケアの場での啓発が表現の欲動に通じる次なる研究テーマへの重要な試金石が得られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 桂英史、西條朋行 分裂生成と「芸術の臨床」～アートはコミュニケーションか映像メディア学(東京芸術大学大学院映像研究科紀要) 査読有 Vol. 1, no. 1 2010 42-66、
- ② 桂英史、西條朋行、精神医療と《芸術の臨床》をめぐるエスノプラクティス、臨床精神医学、 査読有、Vol. 38, no. 9、2009、1335-1353

[学会発表] (計1件)

- ① Saijo, T., Katsura, E., Matsuura, N., Miyaoka, K., Kawamata, T., “Ethno-practice for Clinical Psychiatry and Art Project.” The World Congress of Social Psychiatry, Marrakech, Morocco. Oct 26, 2010.

[その他]

ホームページ等

<http://www.cdc.jp/epoch/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桂 英史 (KATSURA EISHI)
東京芸術大学・大学院映像研究科・教授
研究者番号：60204450

(2) 研究分担者

田甫 律子 (TAHO RITSUKO)
東京芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：30130785
西條 朋行 (SAIJO TOMOYUKI)
東京芸術大学・大学院映像研究科・非常勤講師

研究者番号：50373014

(3) 連携研究者

清水 秀一 (SHIMIZU SHUICHI)
日本伝統医療科学大学院大学・教授
研究者番号：40409165
塚田 信吾 (TSUKADA SHINGO)
日本伝統医療科学大学院大学・教授
研究者番号：80454205
長田 謙一 (NAGATA KENICHI)
首都大学東京・システムデザイン学部・教授
研究者番号：20109151
山口 祥平 (YAMAGUCHI SHOHEI)
首都大学東京・システムデザイン学部・助教
研究者番号：60376910